



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	竹内淳彦名誉会員を偲ぶ(紙碑)(fulltext)
Author(s)	本木,弘悌
Citation	学芸地理(72): 1-2
Issue Date	2016-12-26
URL	http://hdl.handle.net/2309/147288
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	

竹内淳彦名誉会員を偲ぶ

東京学芸大学地理学会名誉会員であり、本学会会長でもあられた竹内淳彦先生（5期，日本工業大学名誉教授）は2015年6月19日に逝去されました。満80歳，工業地理学大家の突然の訃報でした。ここに竹内先生を偲び，謹んで哀悼の辞を申し述べます。

竹内先生は1935年3月に長野県筑摩郡会田村（旧四賀村，現松本市）にお生まれになり，地元の国民学校，新制中学を経て，長野県松本深志高等学校に入学された。高校在学時は地歴会に所属し，チューネンの孤立国理論を松本盆地の糞尿処理と土地利用から明らかにし，2年生の時には松本平の工業地理と題して内陸盆地への工業立地に関心をもち，主な工場をほとんど訪問調査した。まさに竹内地理学の原点は松本平の風景にある。

1953年4月に東京学芸大学に進学され，小金井と世田谷のキャンパスで学ばれた。小金井寮・目黒寮生活の楽しい思い出もさることながら，地理学にどっぷりつかった学生時代を，「東京学芸大学への進学は，私の人生にとってまさに大当たりであり，全くついていた。」と述懐されている（『ひとすじの途』原書房，2005年）。当時，学芸大学には12名の地理学教官が在籍しており，各先生の授業を興奮して受講していたことをよく語っておられた。竹内先生は山口貞雄先生，辻本芳郎先生に工業地理学の手ほどきを受けており，両先生の思い出話は尽きなかった。

先生は大学を卒業後，東京工業高等学校に赴任し，同時に立正大学大学院文学研究科に進学され，昼は教鞭をとり，夜は大学院で研究という生活を続け，その成果は1976年に文学博士授与へ結実した。この間，1967年4月に日本工業大学の開学と同時に同大助教授に赴任。以後，



竹内淳彦名誉会員

同大学生部長，図書館長，評議員を務め，大学法人理事は26年間務め大学の発展に大きく貢献され，2005年3月退職により名誉教授，名譽理事になられている。開学準備から日本工業大学ひと筋，担当科目「工業地理学」は全学生の9割が履修するという人気科目であった。

竹内先生の卒論は「東京地域における自転車工業の地理学的研究」（新地理6（3），1958年）であり，「日本における自転車工業の立地」（地理学評論33（8），1960年）にまとめ上げた。その後，研究の系譜は東京の工業，京浜工業地帯，日本機械工業の地域構造解明へスケールアップして，『京浜工業地帯』（隅谷三喜男他と共著，東洋経済新報社，1964年），『日本の機械工業』（大明堂，1973年）にその成果をまとめている。特筆すべきは当時ブラックボックスとされていた東京城南の工業地域構造について，ドブ板を踏んでの現地調査により「底辺産業」（詳しくは『工業地域構造論』大明堂，1978年）や「産業地域社会」（『技術集団と産業地域社会』大明

堂, 1983年) といった用語と論理を構築することにより明らかにしたことである。これは行政にも大きな影響を及ぼし、自治体はいうまでもなく、国の政策にもこの成果は反映された。産業地域社会とは職住一体のコミュニティーが産業を下支えしている構造を表現したものであり、経済学や社会学にも評価され、1990年には商工総合研究所より「中小企業研究奨励賞」を受賞している。こうした竹内先生の地域への眼差しは「経世済民の経済地理学」を標榜する竹内地理学の真骨頂であり、地域に寄り添う地理学者としての姿勢から生まれた研究成果といえる。郷里信州に関する研究も多く、代表作は市川健夫先生との共編著『長野県の地場産業』(信濃教育会出版部, 1986年)がある。また、『日本経済地理読本』(田中啓爾・富田芳郎監修, 板倉勝高・井出策夫(2期)共著, 東洋経済新報社)は1967年初版の執筆にはじまり、第6版からは編著者となり第9版(2014年)まで約50年にわたって続くロングセラーである。

竹内先生は海外でも大変なご活躍であった。1980年にIGU(国際地理学連合)での発表をきっかけに、IGUコミッションで研究発表を毎年のように行い、工業地理学関連コミッションの常任委員を長年務め、東京大会実行委員長も務め、さらに日中韓の東アジアの工業地理学会議を主催された。先生と国際学会に何度か一緒にさせて頂いたが、先生はドイツをはじめ欧州の研究者、アジアの大学院生から人気が高く、2000年の中国での学会の時に写真を一緒に撮りたいという院生が列をなして並んでいたのが印象的であった。こうした国内外での活躍が評価され、2012年に日本地理学会名誉会員となられた。2013年11月には、これまでの研究、教育、社会貢献に対して瑞宝中綬章の叙勲を授与されている。

竹内先生は「ファミリー」という言葉を多用

して周囲の人々をとっても大切にされていた。竹内研究室卒業生の会である工地会は、ご退職後も毎年開催され、多くの卒業生が全国から集まり、2012年3月に喜寿のお祝いを盛大に行った。ご退職されても毎年、多くの人が集まるのは、まさに先生の人柄である。学芸大の後輩、北村嘉行先生(7期)、上野和彦先生(16期・院2期)をはじめ、私も含め上野研究室の卒業生も大変お世話になるとともに、研究上のお手本とした憧れの存在であった。特に1980年代にはじまる大都市工業研究会では、変わりゆく地域に対して地理学的なアプローチをいつも示唆してくださった。

先生は人の縁をとっても大切にされており、特に地理学を通じての縁には、惜しみなくお力を注いでくださった。お世話になった方は多く、先生への感謝だけでなく、その人柄にふれ、人として学んだことも尽きないと思う。ご退職後も学会講演や調査に出掛けかけながらも、ご自宅で菜園・花壇をご夫婦で楽しんでおられた。ご自宅を訪れるといつも奥様と一緒に温かく歓待して下さり、晴耕雨読の穏やかな日々を楽しんでいるとおっしゃり、庭先の畑を自慢されていた。最後の著書となった『ゆれ動く世界一思い出の会議と旅から一』(風都舎, 2012年)の巻末にこうある。「一生懸命やれば何でも面白い、一生懸命やればたいていの事ができる、一生懸命やれば誰かが助けてくれる」とある。20代から猛烈に走り続けた先生が、学問の楽しさ、生きることの素晴らしさ、人への感謝の気持ち言葉を残して残してくださった。先生は地理学を心から愛し、その面白さを深めてくれた東京学芸大学をとっても大切に思っておられた。本当に魅力的でひたむきな方であった。失望感が未だ癒えないが、竹内先生の笑顔を思い出しながら、襟を正し、哀悼の辞とします。

(本木弘悌 学部39期・院25期)